

福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行 (財) 第五福竜丸平和協会
〒136-0081 東京都江東区
夢の島3-2
都立第五福竜丸展示館内
電話 03-3521-8494



船に会いにくる小学校の多くは、みんなで折った千羽鶴を持参する。子どもたちは大きなダンボールから大切な宝物のように取り出し、「船にあげてね」と笑顔で私達に手渡してくれる。

アインシュタインの夢

第五福竜丸平和協会会長 川崎 昭一郎

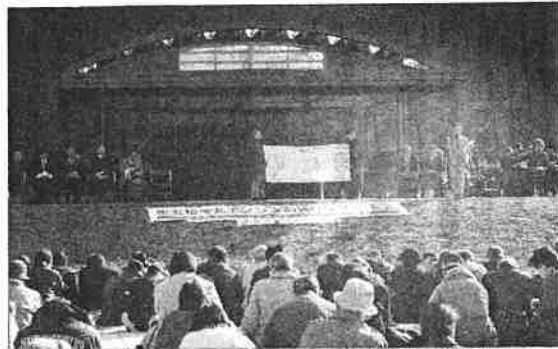
二〇〇〇年、明けましておめでとうございます。
二〇世紀の閉幕にあたり、この世紀を一人の人間で代表させる場合誰にすべきかで、アインシュタイン博士を推す声が多いようです。私も同意見です。
ペレストロイカが始まった頃、当時の東ドイツでヨーロッパの友人たちとこのことについて論じたことがあります。その時は、人間にとって批判的思考がもっとも大切であり、それを育んだ者、広い意味での教育者ではないかというものでした。
アインシュタインは二〇世紀初頭、科学理論に二大革命、量子論と相対論をもたらすことに貢献しました。これら新理論の基盤の上に開花した科学・技術はこの世紀の一つの特徴です。
他方では、二〇世紀は戦争の世紀でもあります。核兵器が登場し、また、世界平和運動、核兵器禁止運動も生まれました。

第五福竜丸展示館の管理・運営に当たっている財団法人第五福竜丸平和協会は、水爆実験の被害に焦点を当てるとともに、原水爆のない未来をめざしており、核兵器による人類破滅に危機を警告したアインシュタイン・ラッセル宣言を座右の銘としています。一方、質量エネルギーに換算するアインシュタインの式は原水爆の原理の基本をなしています。
二〇世紀におけるアインシュタインの位置づけは上記のような脈絡で行なわれることが多いですが、私がアインシュタインに敬服しているのはもう少し違った意味もあります。
アインシュタインは現代物理学の基礎を作りながら、それにもとづくその後の華々しい発展、物理学の本流には身をおかず、孤独に、その後の人生約三〇年間を、当時は不毛と思われていた統一場理論、究極理論の探求に捧げました。ところが、一九九〇年代になって、アインシュタインの夢を二一世紀にかなえてくれそうな曙光が見えてきたのです。

私たちは、このアインシュタインの粘り強さに学び、自ら正しいと信ずるところをどこまでも追及していくことが大切だと感じます。昨年暮に第五福竜丸エンジンが併設展示され、館内常設展示も一新されて第五福竜丸展示館は内外とも新年にふさわしく装いを新たにしました。
本年も、大勢の方々に来館いただけることを願っています。

市民の運動実らせ、第五福竜丸エンジン、船体に帰る

第五福竜丸エンジンは、市民の熱い運動を実らせ、いま母体である第五福竜丸の元に帰った。
一月二二日展示館前広場。新しく作られたエンジン展示の建物前で、「第五福竜丸エンジンお帰りの集い」(第五福竜丸平和協会、第五福竜丸エンジン東京夢の島へ都民運動共催)が開かれ四百余人の人々が参加、長い苦難の航程を刻んだ船とエンジンの再会を喜び、新しい航海への出発を祝った。
四六年前のこの日、第五福竜丸はマ



「第五福竜丸エンジンお帰りの集い」2000年1月22日

スト高く大漁旗をかかげ出航したが死の灰を浴び母港に帰ったとき、大漁旗はマストになかった。厳しい冬の潮風が吹く展示館前にはこの日、その大漁旗は青空にはたため、集いに集う人々を迎えていた。エンジンはかつて廃船第五福竜丸が傾くように沈みかけた埋立地の海を臨んでりんと立って立っていた。はるかに焼津に太平洋にピキニへ館の黒い外壁を背に、どっしりと座していた。黒く焼けたたれたような姿になったが、「忘れ得ぬ船」にふさわしい風格があった。

「お帰りの集い」は午後一時半、出航を告げる汽笛を象徴するホルンの吹奏ではじまった。東京地婦連田中里子さんの、はじけるようなよるこびをこめた「お帰りの集い」のよびかけと開会の挨拶が会場に集った人々の心を代弁した。全員が「お帰りの集い」を唱和しエンジンに手を幾度も振った。人々の胸にさまざまな思いが去来し、潮風と共にエンジンの鼓動が伝わった。

川崎昭一郎平和協会会長がエンジンを迎える側として、運動をすすめた人々への感謝と決意を力強く述べた。東京原水協柴田桂馬さんの司会、東京都原爆被害者団体協議会の村田未央さんの進行で、和歌山から夢の島への運

動の「リレートーク」がそれぞれの地で運動をになった。「和歌山県民運動」「京都の会」「名古屋の会」「河地域実行委員会」「静岡県実行委員会」「三浦に招く会」そして「都民運動」から創意とロマンに満ちた報告が次々に進められ感動をよんだ。沿道のルートを示す地図を前に、和歌山市民協会の尾添仁さんがあいさつ。尾添さんにうながされるようにエンジンを引き揚げた杉末廣さんが「わが娘の嫁入りのような心境だ。あ、やっぱい。夢のようで、感謝の思いでいっぱい。エンジンはその思いをこれから見る人々にそと語りかけていくだろう」との大きな拍手に包まれた。東京都生協連の水越雅子さんは都民運動としての経過報告を行い、「運動」がどんなに広範な市民運動として結成され広がり、世論、東京都の努力を盛り上げたか、修理保存に多くの専門家が協力したか、二年あまりに及ぶ運動をつぶさに紹介した。館内ではその活動を「写真展」も行なわれ報告に彩りを添えた。

東京都多摩区自治会協議会、江東区職員労働組合、東京地域婦人団体連盟の宣伝・募金活動などが報告され、エンジンを夢の島に運び、保管した日本通運には感謝状が「都民運動」から贈られた。

東京都議会各党派、都建設局東部公園管理事務所等、出席された来賓が紹介された「運動」の当初から困難な中で力を尽くされた関係者に心からの拍手が贈られた。和歌山県海南市、御浜町、古座町各町長のメッセージ、第五福竜丸漁労長見崎吉男さん、乗組員大石又七さん他から

メッセージが寄せられていることが東京都消費者連盟の寺田さんから紹介された。出席された大石さんは紹介されたが寄せられたメッセージには「このエンジンに亡くなった機関員の魂を重ねてほしい」と述べられていた。
エンジンには、大漁めざし躍動していた乗組員の思いも、死の灰を浴び全速力で焼津に戻った乗組員の苦しみ怒り悲しみも、その後の生涯の思いのすべてが染み込んでいるのだ。市民運動の思いもその全身に内包されている。
集会はその全ての願いを共有させた。集会は、「この灯永遠に合唱団」のコーラスと原爆許すまじの全員合唱でおわった。主婦連合会兵頭美代さんの「さあみんなで核兵器のない未来へ前進を」の閉会挨拶が参加者の胸に熱く燃え広がっていった。

この日、館内では多くの小学生・中学生の見学があった。その中で、東京原水協の青年たちの呼びかけた見学と学習会が五〇名近い若者を結果し開かれ、大石又七さん、東京原爆被害者団体協議会の田川時彦さんを囲んで運んで熱心な交流が行なわれた。運動の継承とさらなる発展がそこに示されていた。

全ての行事を終え、大漁旗もおろす頃、夕陽の久保山愛吉記念碑前には「運動」を記念して、東京地婦連緑の銀行から贈られ植樹された「八重紅大島桜」の若木がいっばいに芽をふくらませていた。春にはその優雅でたおやかな花を咲かせることだろう。

第五福竜丸とパグウォッシュ会議

新しい世紀への幕明けに思う 小川 岩 雄

核兵器も戦争もない世界の実現を目指す科学者の国際会議として知られている「パグウォッシュ会議」は、一九五五年七月に発表された「ラッセル・アインシュタイン宣言」のよびかけに添えて一九五七年七月に発足した。

この会議は以後現在まで四〇年にわたり毎年開催され、初期には冷戦下での東西間の交流と相互の理解の場として、のちには核軍縮の方向を探り、その促進を計る非公式な折衝と協力の機会として、状況の改善に少なからず貢献した。その功績により、一昨年十一月にはこの会議は、当時の会長J・ロートブラット博士とともに、ノーベル平和賞を授与されている。

その歴史的な「ラッセル・アインシュタイン宣言」の直接の契機となったのが、まさに前年(一九五四年)三月一日、中部太平洋上で操業中の漁船第五福竜丸が、一六〇キロも遠方での米国の水爆実験による大量の放射性降下物(死の灰)を被って乗組員全員が障害を受け、一人が死亡したといわゆる「ピキニ事件」であった。

この事件は全世界の人々、とくに

科学者に強い衝撃を与え、英国の数理学哲学者バートランド・ラッセル卿が起草した警告の文章(当初は「アビール」(訴え)と題された)が、米国在住のアインシュタイン博士を始め、湯川秀樹博士ら八人(当時)のノーベル賞受賞者を含む十一人の高名な科学者の署名を添えて発表された。これが今日ラッセル・アインシュタイン宣言(以下では単に「宣言」と呼ぶ)と呼ばれる歴史的文書である。

宣言は、水爆のような大量破壊兵器が出現した結果、将来万一世界戦争が起これば、人類は文字通り終末を迎えるであろうことを、第五福竜丸の被災に言及して強く警告し、今はあらゆる国際紛争を戦争に頼らず、平和的に解決するよう求めている。

とくにこの宣言は、東西両陣営、とりわけ米ソ間の冷戦の激化を憂慮し、本文の末尾を有名な一句「あなた方の人間性を心に留め、他のことは忘れてほしいのです」で結んだ上で、東西間の理性的な対話の場を求めて、科学者の国際会議の開催を提唱したのであった。

そしてその呼びかけに添え、二年

後の一九五七年七月に、カナダの東岸の静かで美しい漁村であり住宅地でもあるパグウォッシュ村の民家に分宿して開かれたささやかな国際会議が、最初のパグウォッシュ会議である。会議は参加者が僅か二十数人というごく小規模なものであったが、米、ソ、中、日など東西各国から、ノーベル賞級の指導的学者者が参加した。わが国からは湯川秀樹、朝永振一郎両博士が出席している。また、当時緊急の国際問題であった核爆発実験による放射性降下物の現状や、その影響(遺伝や発病など)に明るい専門家も加わり、きわめて権威が高くかつタイムリーな構成となった。

筆者も日本での降下物の観測データのの一部を携え、この歴史的な会議に参加することができたことは、望外の喜びであった。

当時はまだ冷戦下だったが、会議は学術セミナーさながらの和やかな雰囲気の中で進められ、討論は連日深夜にまで及んだ。先ず行なわれたのは、米英やソ連などの大気圏内核実験による大気の放射能汚染の程度や危険性の評価である。その結果、立場の異なる日英米仏ソの観測データがほぼ一致していることが分かり、相互の信頼と科学者としての自信が大いに深まった。

そしてその信頼の上に、参加者は一致して国際間の交流と緊張の緩和の重要性を強調し、核実験競争、さらには核戦争の危険性を科学的観点から指摘して、その停止を全世界に訴えたのである。

こうした訴えの主旨は米英ソ仏中、日など、各国の首脳にも伝えられ、核不拡散条約(NPT)、包括的核実験禁止条約(CTBT)などの重要な軍備管理条約の締結に導いた。

むしろその背景には、核保有国の増加や軍備競争の激化を憂慮する、世界各地での市民運動と世論の高揚があった。市民、とくに日本国民に関心が高まった。高まった最大の要因が、広島と長崎に続くピキニでの核実験による第五福竜丸の被爆体験であったことは、想像に難くない。

二度にわたる悲惨な世界大戦に加えて、戦後の冷戦期の核実験競争、その中で発生した第五福竜丸の悲劇など人類が愚行を重ねた二〇世紀もようやく幕を閉じ、新世紀を迎えることになったが、人類は果たして過去を徹しく反省し、ラッセル・アインシュタイン宣言やパグウォッシュ会議が目指した核兵器も戦争もない世界を実現できるであろうか。英知が問われている。(立教大学名誉教授、核物理学、協会理事)

第五福竜丸を原点に始まった母親運動

有 菌 栄 子

第五福竜丸エンジンが、多くの平和を思う人々の心をつないで、このたび本体の元に返ってきました。

戦争法や盗聴法、国旗・国家法が国会で強行され、憲法調査会が国会内に設置されるなど、戦後五十五年間、日本が他国を攻撃することなく守り続けてきた平和が、今脅かされかねない事態を迎えています。こうした時の「エンジンおかえりなさい」の集いは、あらためて私たちに原水爆・核の恐ろしさ・残酷さを思い起こさせてくれると同時に、平和な二一世紀への誓いを一層固いものにしてきています。さらに、私どもが携わる母親運動はこの第五福竜丸の被爆を原点に、核戦争から子どもを守ろうと始まった運動であり、感慨一入です。無言で訴えていた船がエンジンを得て蘇り、世界に向けて平和の船出、打ち鳴らすドラの音が胸に響くよう力が湧いてくる思いです。

一九五四年三月一日、ピキニ環礁

で行われたアメリカの水爆実験は、当時、危険区域外にいた日本漁船第五福竜丸乗組員三人の上に死の灰を浴びせました。(この中の一人久保山愛吉さんは治療の甲斐もなく遂にその年九月に全国民の注目のうちに亡くなりました)以来、ピキニ環礁ではアメリカの水爆実験が度々行われ、五月半ばから日本各地に放射能を含んだ雨が降り、国全体がその危機にさらされました。

水爆被害は、言うまでもなく広範囲、長期間、人体その他の生物に影響を残します。漁港に返った二百艘近い船から降ろされたマグロは、その殆どを廃棄せざるをえませんでした。日本人の主要な食料である魚類が食べられない、その結果商売のできなくなった魚屋、加工業者は勿論、雨によって野菜、果物、牛乳、茶等にも安全度を越えた放射能が測定され、国民全体の生活を脅かしました。

戦争による大量殺人は目に見えま

すが、この悲惨な大量破壊は戦争以上の範囲と巨大な力を以って、しかも全く無感覚のうちに人類の誕生を阻んでおり、特に生命を生み出す母親にとっては戦慄この上ないものです。国会でも水爆実験禁止の決議、各新聞も筆を揃えて反対の論説を掲げ、婦人団体や労働組合は先頭に立って街頭署名を行い、たちまち三千万筆以上の成果を上げたのです。

「恐るべき放射能の被害は、決して一国の恐怖のみに止まらな。生命を脅かす国際的恐怖の問題」として、平塚らいてう氏等の努力が実り、国際婦連連を通して、翌年七月、スイスローザンヌで世界母親大会が開催されることになったのです。この大会に十四人の代表を送り出すため、六月東京豊島公会堂で開催されたのが第一回日本母親大会です。

教員や普通のお母さん、農業・漁業婦人、閉山になった炭坑の主婦、広島、長崎の被爆者、日雇い労働者ら二千人の参加者のなかに勿論、久保山すずさんも。

「夫は、水爆で死ぬのは自分を最後にと言って亡くなりました。水爆をなくしてください。戦争は

なくしてください!」と。

「涙の大会」から、今年(一九六六年)目を迎えます。当時(一九五四年)は、女性の地位は格段といえるかも知れませんが、しかし、多くの母親・女性が生活の不安、子育ての悩みを抱え、職場では悪戦苦闘を強いられ、それが現状です。沖縄を始め全国に米軍基地が居座り、平和を守る運動も今が正念場です。

今年、第四十六回日本母親大会は、七月東京で開催されます。二日間延べ二万五千人余が予想されるこの大会は、何としても、平和な二一世紀への確かな懸け橋となる大会にしたいと思っています。東京母親では、東京大空襲の犠牲者十万人の鎮魂と、平和への誓いを込めて要求カードを作成、十万羽の折り鶴に託して会場を飾ろうと取り組みを始めています。また、参加者には、第五福竜丸展示館見学の便もとり、平和への決意を新たにする力としたいと思っています。

第五福竜丸展示館がエンジンを開き、世界に向かう平和の船であることを確信して、草の根の母親運動を一層前進させたいと思っています。(東京母親大会連絡会)